

冬春野菜等の需要に応じた生産の推進について (令和6年度冬春野菜等の需給ガイドライン)

令和6年6月

農林水産省農産局園芸作物課

野菜価格安定制度における計画生産・計画出荷の仕組み

- 需要に即した計画的な生産・出荷を推進するため、国は指定野菜について概ね5年ごとに需要及び供給の見通しを策定するとともに、年2回(冬春・夏秋)需給ガイドラインを策定。この需給ガイドラインを目安として、出荷団体等は、供給計画を作成し、計画に即した野菜の出荷に努める仕組み。
- 供給計画に即した出荷がなされるよう、指定野菜価格安定対策事業においては、供給計画と出荷実績との乖離度に応じて生産者補給交付金を減額する措置のほか、前年度の価格低落時における需給調整の取組実績等に応じて補填率に差を設ける措置を導入。

需要及び供給の見通し(国)

(概ね5年ごとに策定)

指定野菜の種別ごとに、概ね5年後の需要量、供給量、国内産供給量の見通しを策定

需給ガイドライン(国)

(毎年、6月:冬春野菜、12月:夏秋野菜に策定)

直近の需給動向等を踏まえ、種別ごとに次期作の需要量、供給量、国内産供給量の見通し、作付面積の指標を策定

供給計画(出荷団体等)

需給ガイドラインを目安とし、種別ごとに年2回策定(播種・定植前の当初計画、出荷前の確定計画)

指定野菜価格安定対策事業における措置

① 供給計画の作成を加入要件とする(契約野菜収入確保モデル事業を除く)

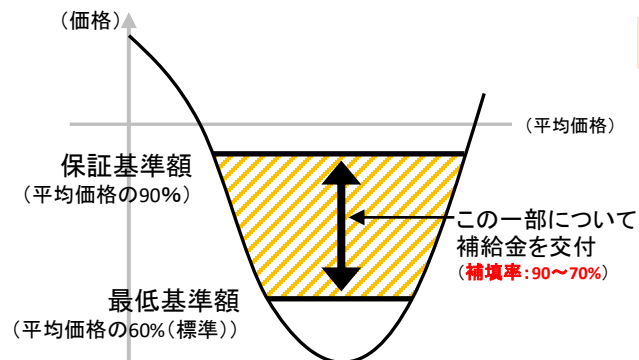
② 供給計画と出荷実績との乖離度に応じて交付金を減額

＜供給計画と出荷実績の乖離度合い＞

～	△60%	△50%	△40%	△30%	△20%	0	+20%	+30%	+40%	+50%	+60%	～
減額率 60%	減額率 50%	減額率 40%	減額率 30%	減額率 20%	減額なし		減額率 20%	減額率 30%	減額率 40%	減額率 50%	減額率 60%	

※ ±20%から±60%まで±10%間隔で乖離度合いを区分し、減額率は0～60%。

③ 過去3年の供給計画と出荷実績の乖離度や、緊急需給調整事業の取組実績等に応じて、生産者補給交付金の補填率を設定



補填率90%(産地区分Ⅰ)となる場合

以下の①・②の両方を満たす出荷団体

- ① 次のa又はbに該当すること
a. 産地強化計画(加工・業務用推進タイプ)を策定
b. 産地強化計画を策定し、直近3か年の計画的出荷割合が基準を満たす※
- ② 前年度において、対象品目の価格が緊急需給調整事業の発動価格以下となった際、対象品目の出荷があり、かつ、緊急需給調整事業を実施したこと

※ 直近3年の各年の計画的出荷割合 < 120/100、かつ、計画的出荷割合の直近3年平均 < 110/100

令和6年度冬春野菜等の需給ガイドライン(概要)

- 需給動向や人口、単収等のすう勢を基に、有識者の意見も踏まえつつ、指定野菜に係る「需給ガイドライン」を策定。
- 令和6年度冬春野菜等の需給ガイドラインでは、現状のすう勢値等を活用し、多くの品目で直近作付面積と近い作付面積指標を提示。
- 一部品目においては、**価格の低落が常態化しており、引き続き需要に応じた出荷に取り組むことが重要。**
- なお、冬春野菜は、近年の暖冬の影響による出荷集中とその後の出荷減少によって、価格の大幅変動が発生していることから、計画に即した出荷が可能となるよう安定供給体制の構築が必要。

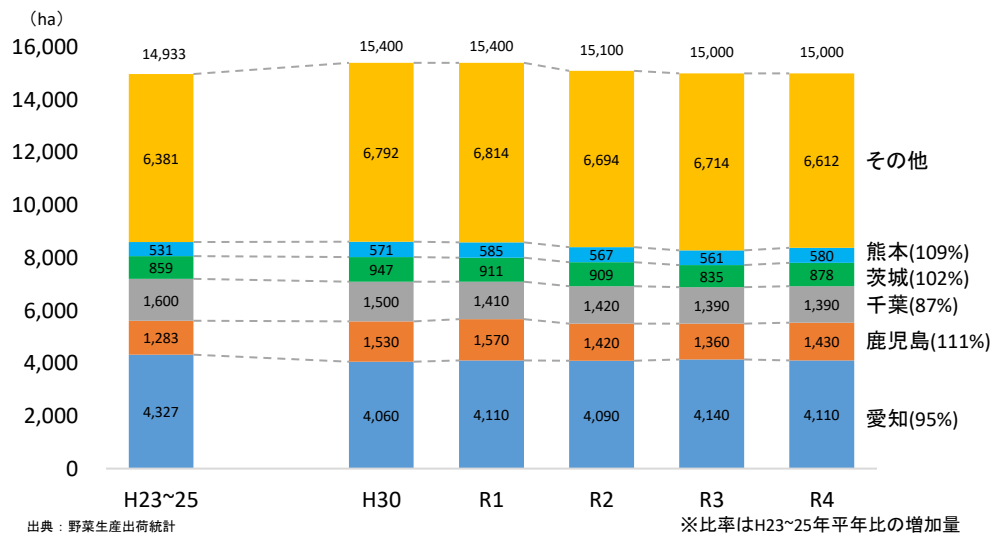
種別等	需要量(t)	供給量(t)	国内産供給量(t)	作付面積(ha)	前年度実績比	前年度ガイドライン比
冬キャベツ	420,400	595,900	592,400	14,900	99.3%	99.3%
春キャベツ	256,400	363,400	357,500	8,750	99.8%	100.6%
冬春きゅうり	267,800	293,800	277,200	2,490	100.0%	97.6%
秋冬だいこん	674,300	797,100	788,100	18,800	100.0%	96.9%
春だいこん	167,000	197,400	192,400	4,070	100.0%	100.5%
たまねぎ	1,281,900	1,498,600	1,134,300	23,200	91.3%	100.0%
うち北海道産	749,400	876,100	721,700	12,800	85.9%	100.0%
うち都府県産	532,500	622,500	412,600	10,400	99.0%	100.0%
冬春トマト	315,200	377,900	373,900	3,650	100.0%	96.3%
うち大玉トマト	230,100	275,900	272,800	2,490	100.0%	95.0%
うちミニトマト	85,100	102,000	101,100	1,160	100.0%	99.1%
冬春なす	99,800	115,600	114,700	1,030	100.0%	100.0%
冬にんじん	291,000	319,200	234,000	7,420	99.9%	98.9%
春夏にんじん	227,100	249,100	155,400	3,930	100.0%	98.7%
春ねぎ	60,600	88,500	78,300	3,330	100.0%	100.6%
夏ねぎ	67,800	98,900	86,700	4,720	100.0%	98.5%
秋冬はくさい	461,900	578,100	577,800	11,700	99.2%	97.5%
春はくさい	93,700	117,200	117,000	1,800	100.6%	100.0%
ばれいしょ	1,809,400	2,241,200	1,172,200	71,500	100.1%	100.8%
冬春ピーマン	70,700	87,500	73,700	700	100.0%	95.9%
ほうれんそう	223,500	270,000	207,300	18,900	100.0%	97.9%
冬レタス	147,400	181,200	176,700	7,370	99.9%	100.0%
春レタス	85,900	105,600	105,300	3,720	100.0%	96.4%

※着色している種別等については、別途詳細データを記載

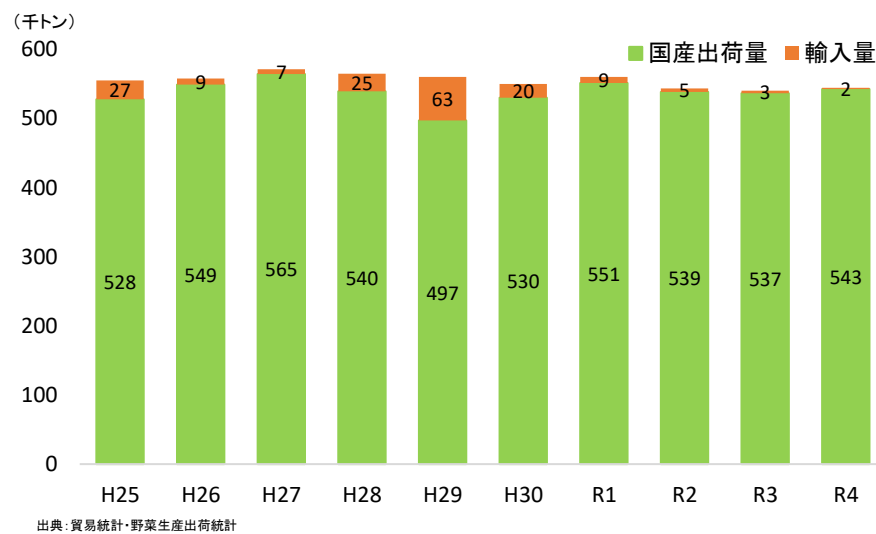
冬キャベツの生産・価格等動向①

- 愛知、鹿児島、千葉で全体出荷量の約5割を占める。10年前と比較し、全体作付面積は横ばいで、全体出荷量は増加。主産県では、千葉の作付面積・出荷量が減少した一方で、鹿児島、茨城の出荷量が増加。
- 極少量ではあるが、加工・業務用に主に中国から毎年一定量が輸入されている。国産の不作時に代替として輸入量が増える傾向。

1. 作付面積の推移



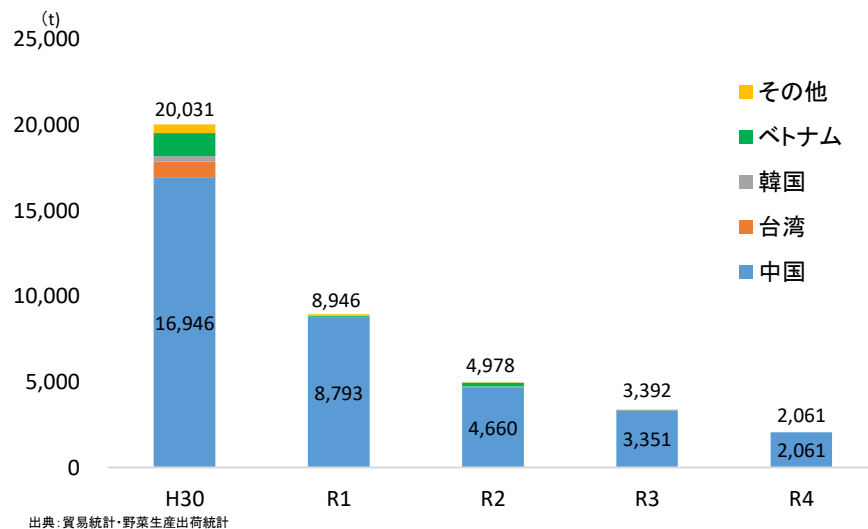
3. 出荷量と輸入量



2. 出荷量の推移



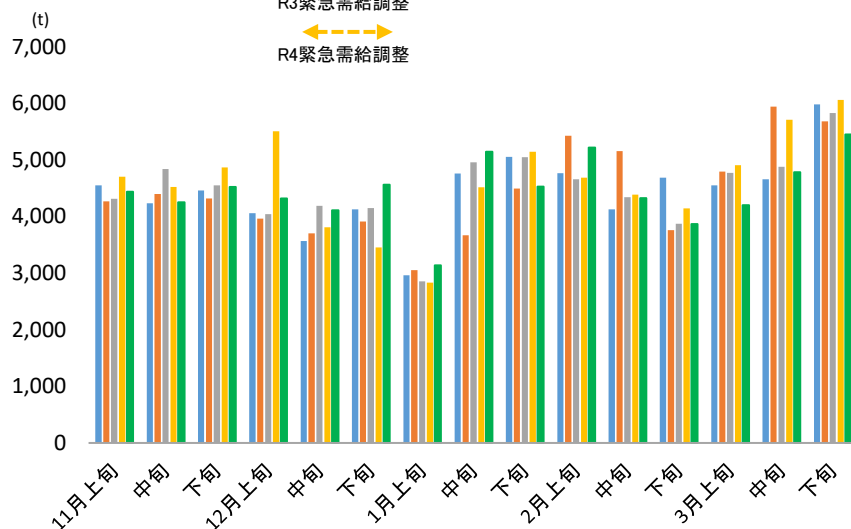
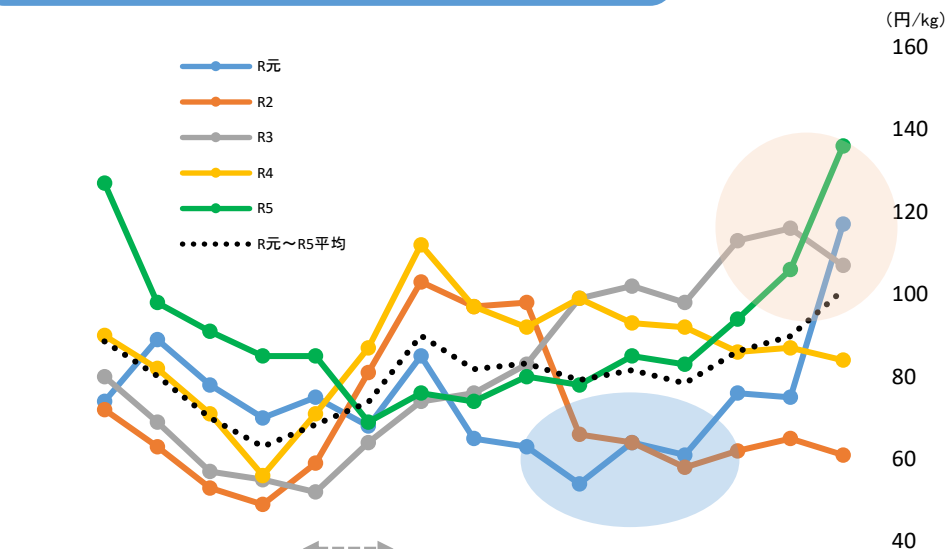
4. 輸入先国の内訳



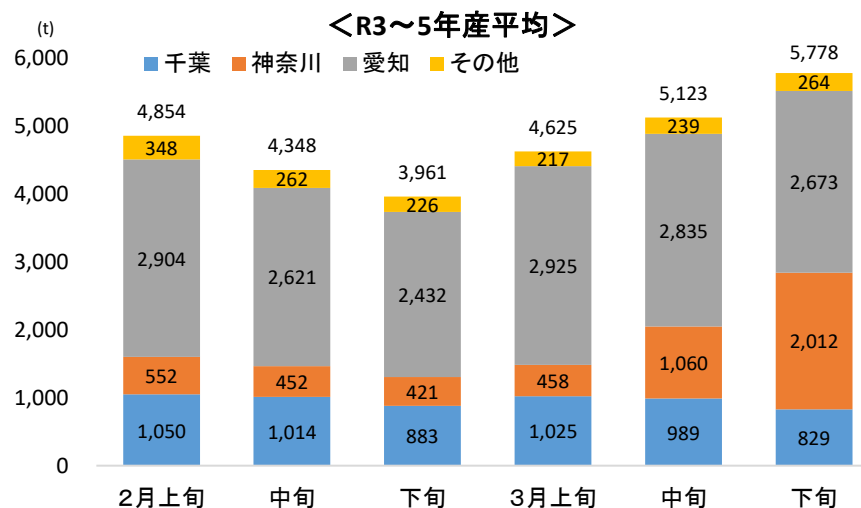
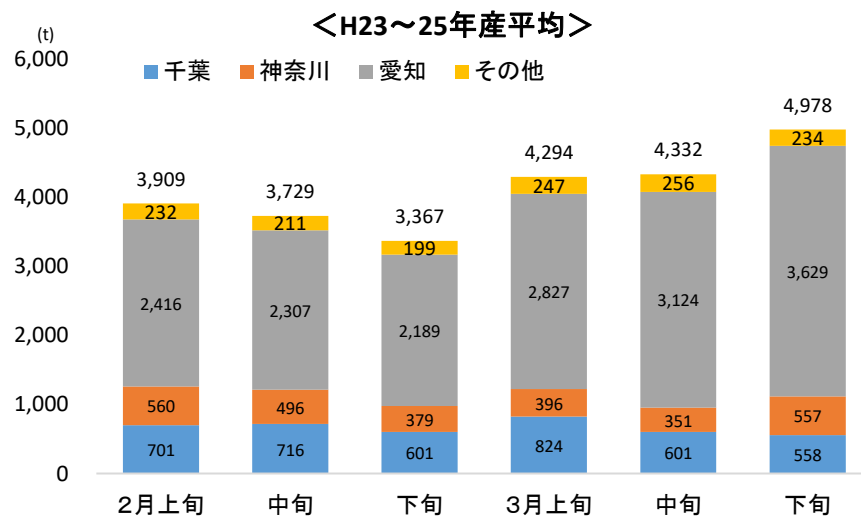
冬キャベツの生産・価格等動向②

- 暖冬等の影響によって生育が前進傾向となり、1月～2月が安値となる一方、3月は高値となる傾向。
- 令和3年度～4年度の2年連続で緊急需給調整事業を発動。

5. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移



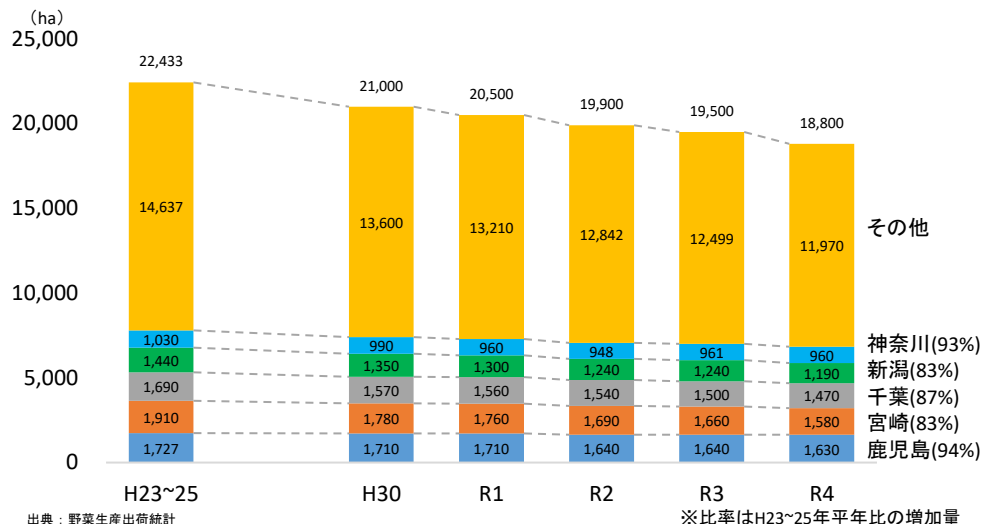
6. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷(2月上旬～3月下旬)



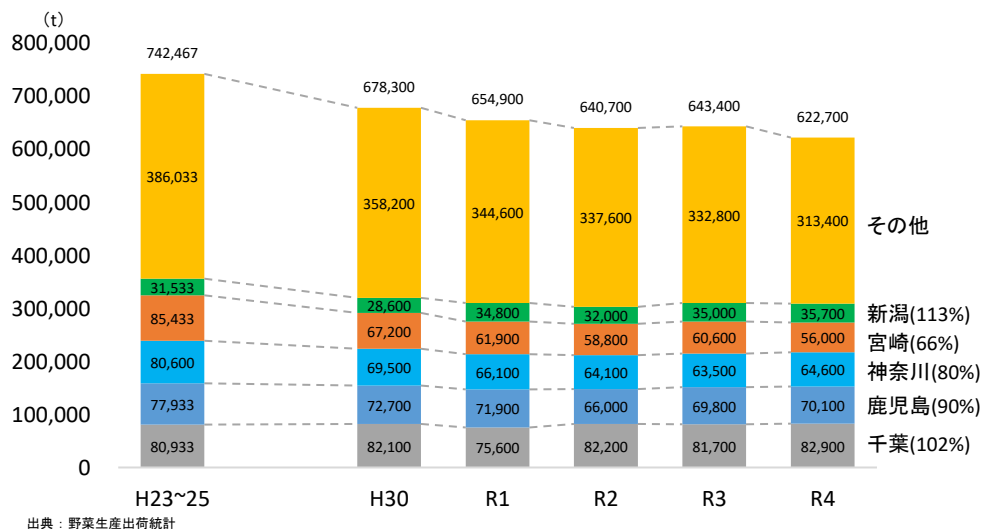
秋冬だいこんの生産・価格等動向①

- 千葉、鹿児島、神奈川、宮崎、新潟で全体出荷量の約5割を占める。10年前と比較し、全体作付面積、全体出荷量ともに大きく減少。主産県では、千葉、新潟の出荷量が増加しているが、その他主産県は作付面積・出荷量ともに減少の傾向。
- だいこん(生鮮)の輸入量は極少量であり、国内供給のほぼ100%が国産品。乾燥だいこんが中国等から一定量輸入されている。

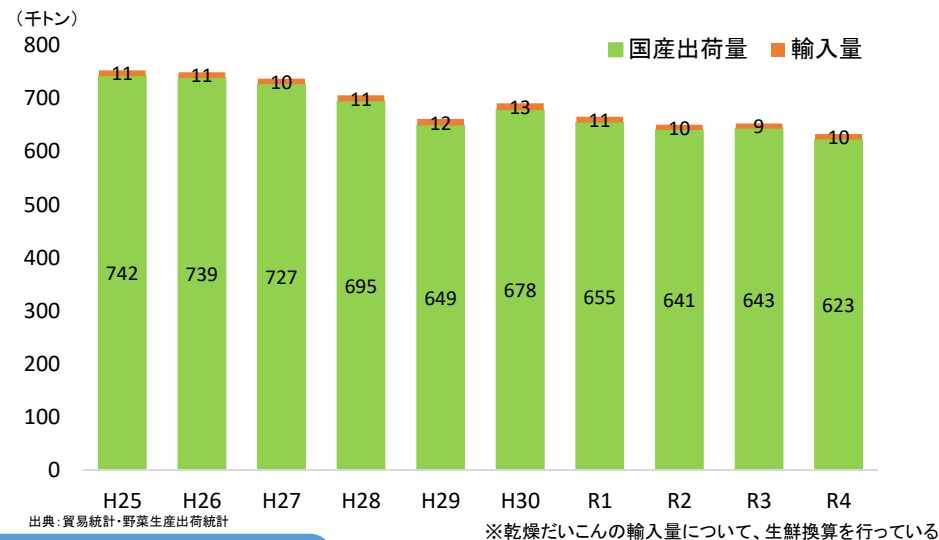
1. 作付面積の推移



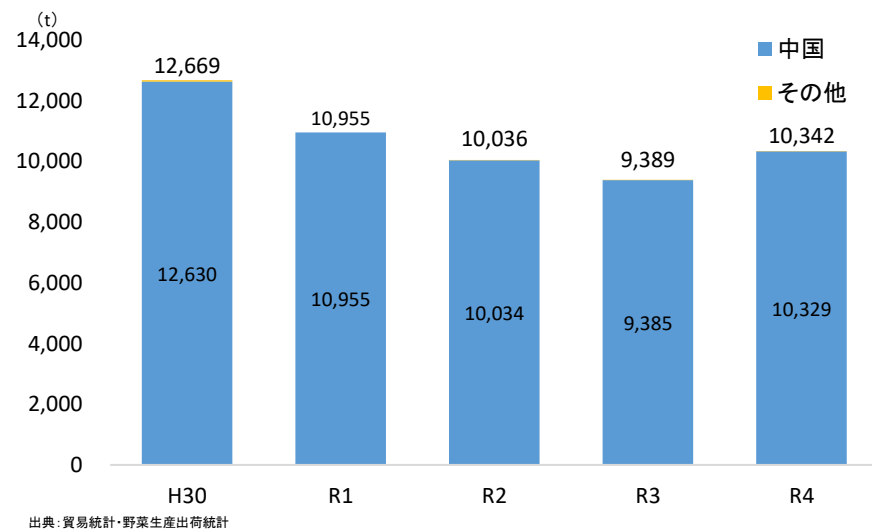
2. 出荷量の推移



3. 出荷量と輸入量



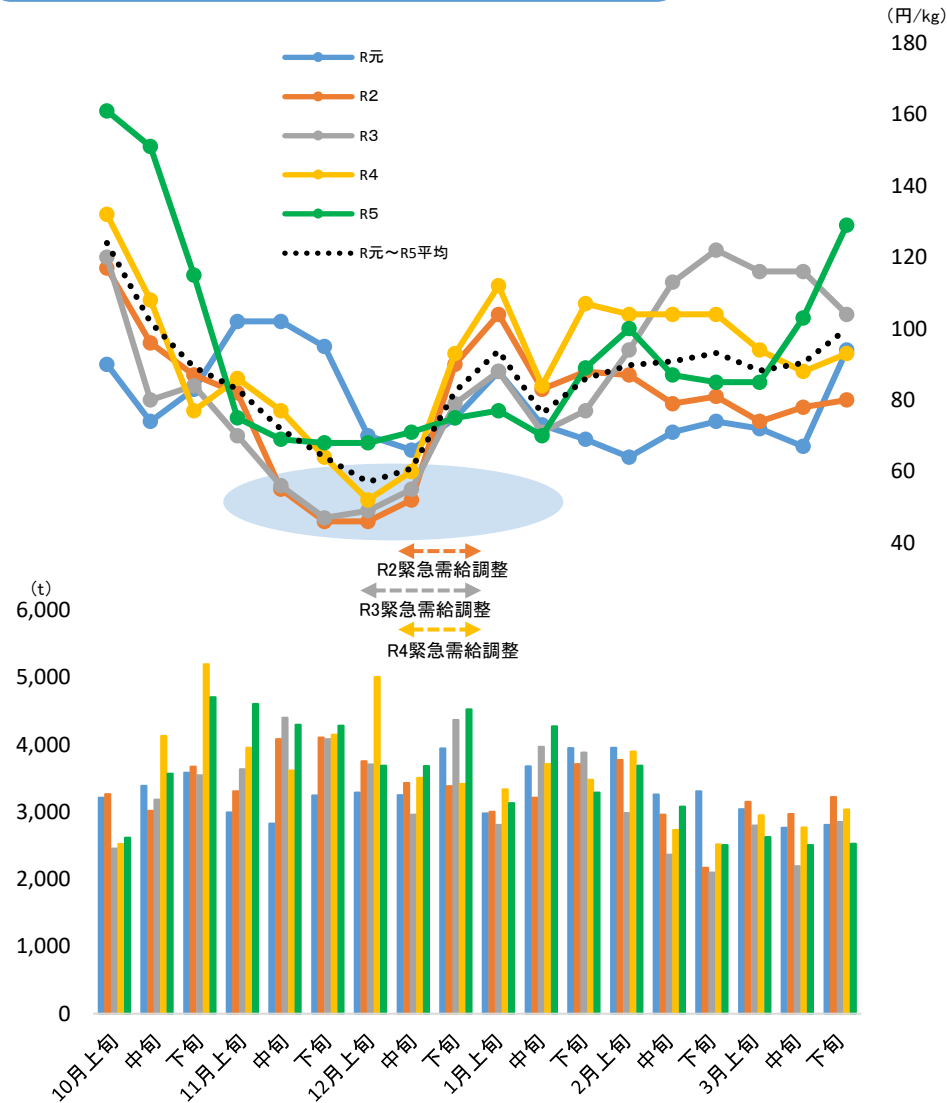
4. 輸入先国の内訳



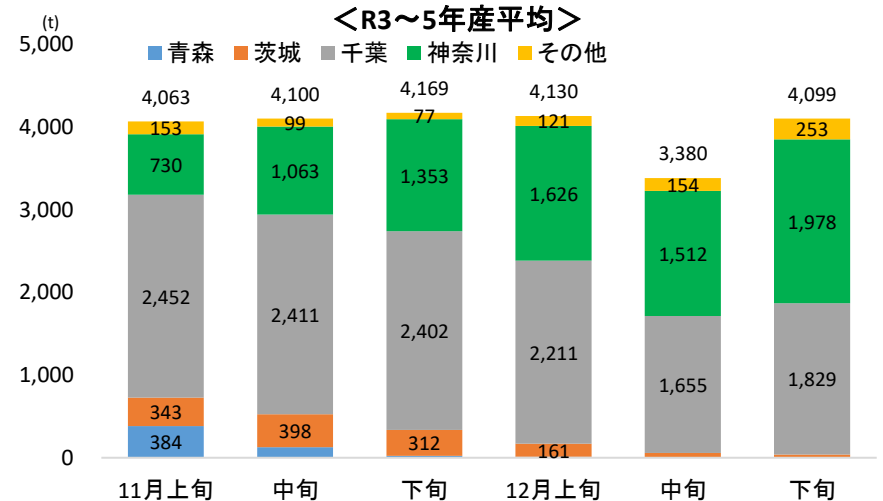
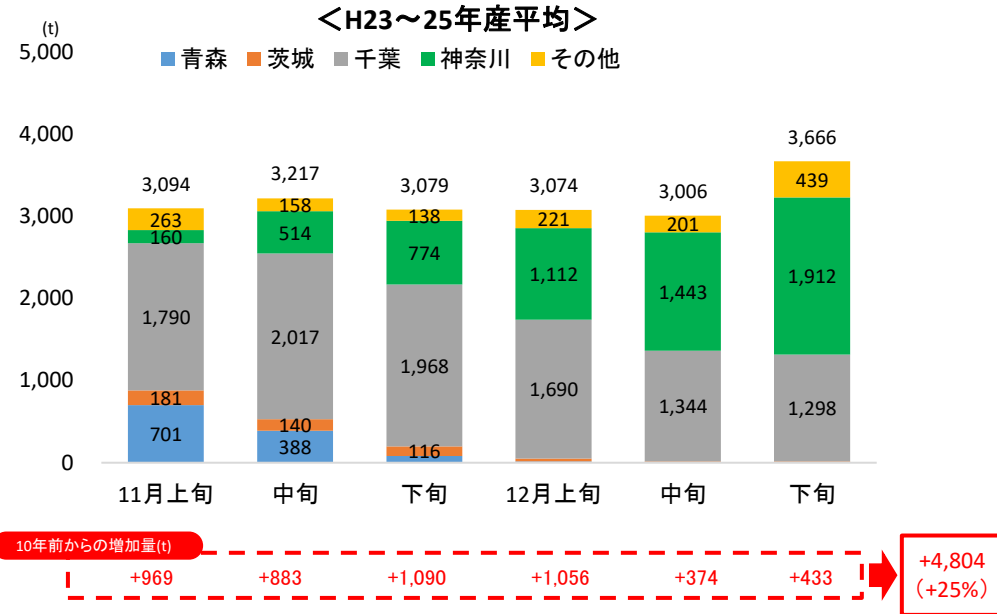
秋冬だいこんの生産・価格等動向②

- 出荷量が増加する12月にかけて価格が低落する傾向にあり、令和2年度～4年度の3年連続で緊急需給調整事業を発動。令和3年度(令和4年2月～3月)は主産県における低温の影響で出荷量が減少し、一時的に価格が上昇。

5. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移



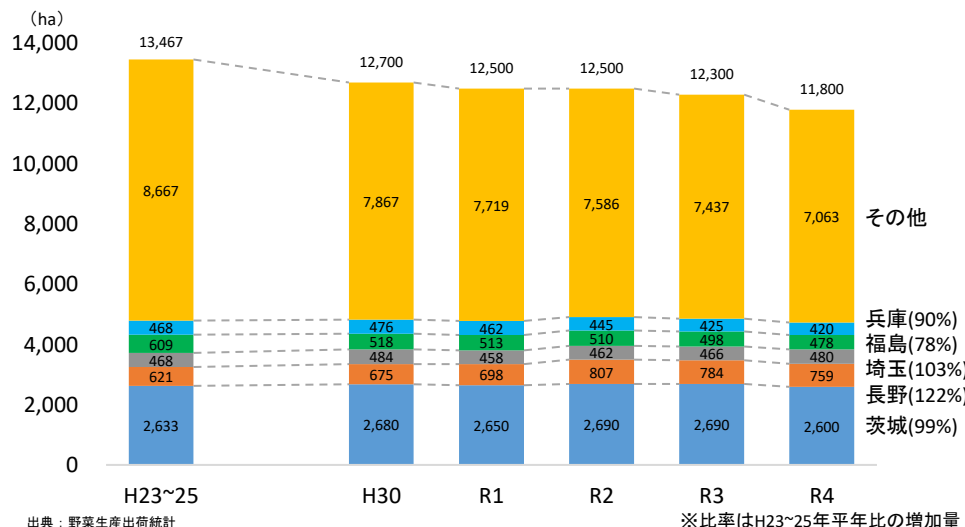
6. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷(11月上旬～12月下旬)



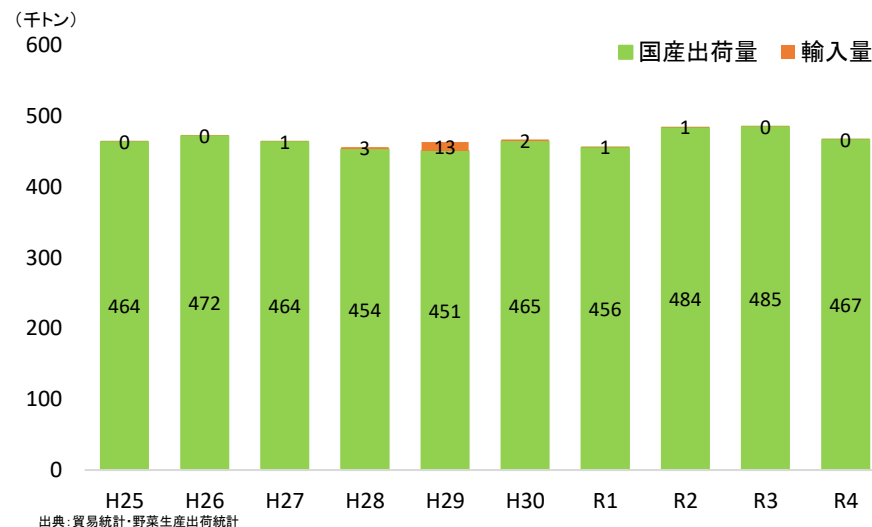
秋冬はくさいの生産・価格等動向①

- 茨城、長野で全体出荷量の約5割を占める。10年前と比較し、全体作付面積は減少しているものの、全体出荷量は微増。主産県では、茨城の作付面積は微減、出荷量は増加、長野は作付面積・出荷量ともに大きく増加している。
- はくさい(生鮮)の輸入量は極少量であり、国内供給のほぼ100%が国産品となっている。

1. 作付面積の推移



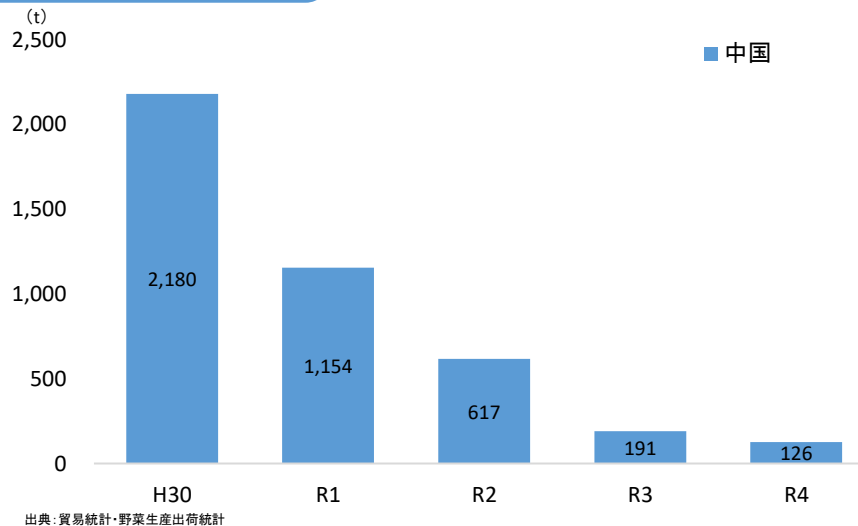
3. 出荷量と輸入量



2. 出荷量の推移



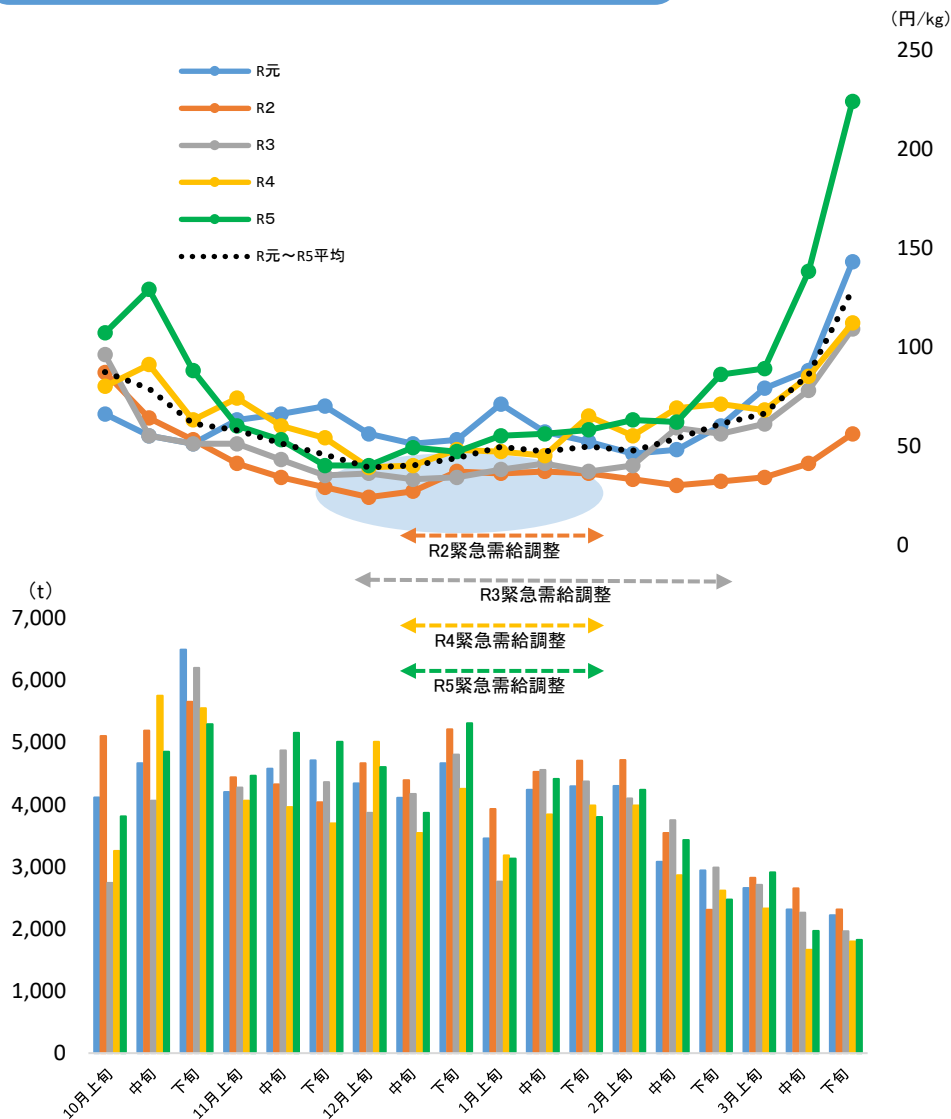
4. 輸入先国の内訳



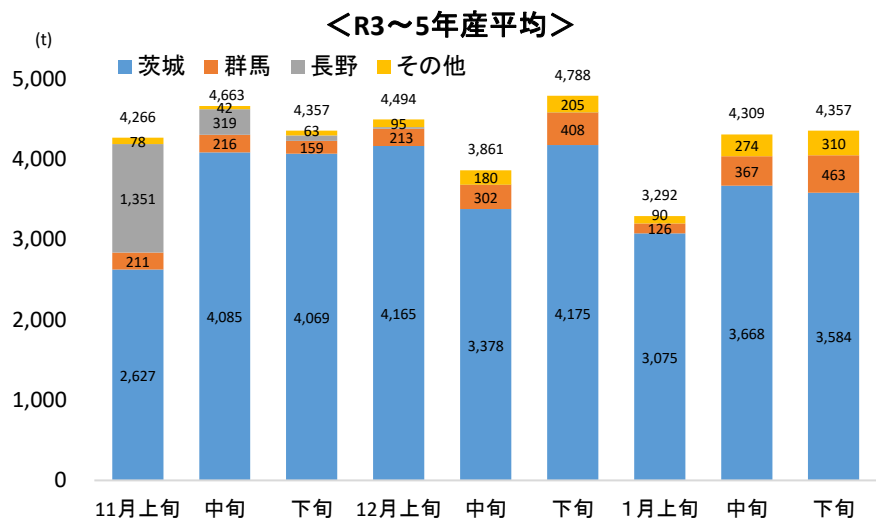
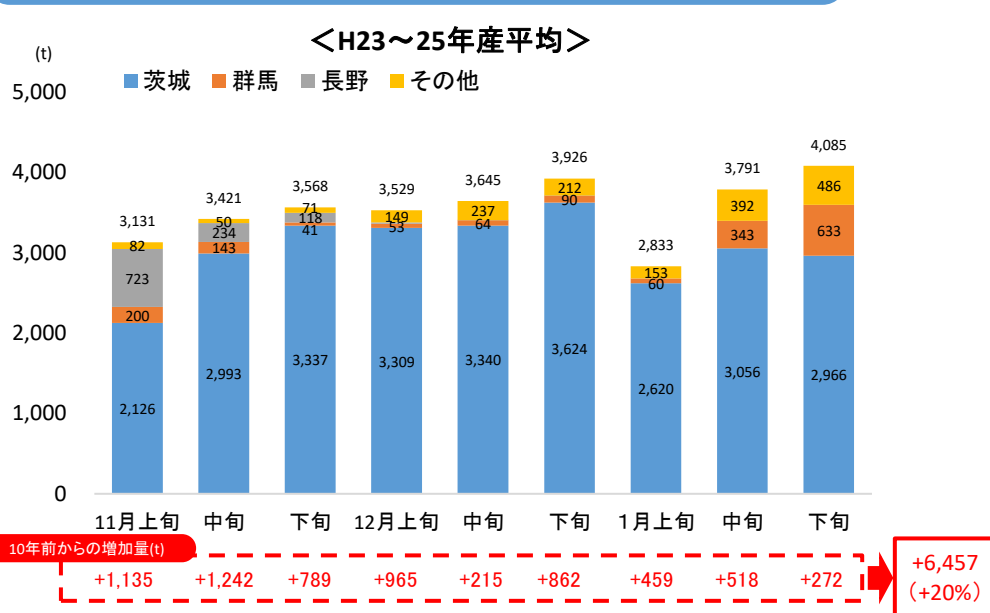
秋冬はくさいの生産・価格等動向②

- 全般的には、夏はくさいの残量と秋冬はくさいの出始めの重なることによって10月の出荷量が増加し、安値となるほか、近年は暖冬等の影響によって12月～1月の価格が低落傾向にあり、令和2年度～5年度で4年連続で緊急需給調整事業を発動。

5. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移



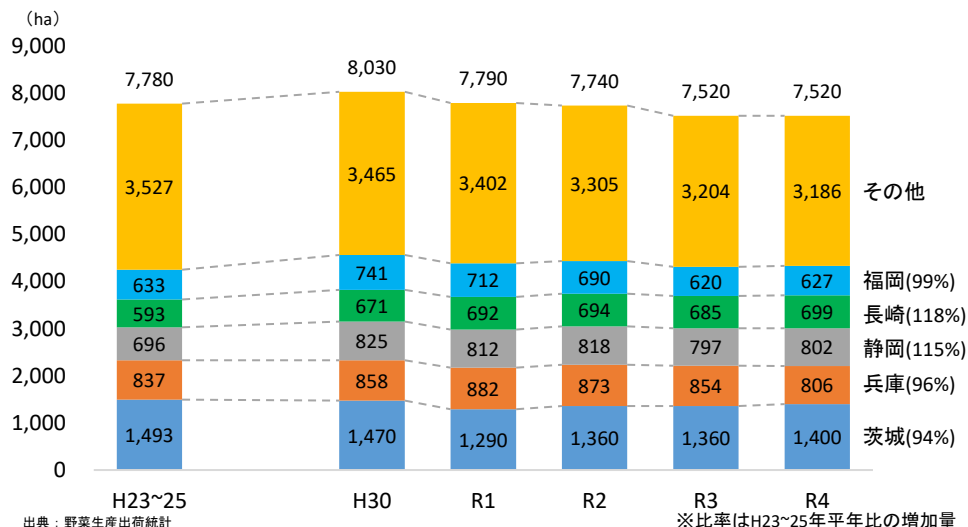
6. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷(11月上旬～1月下旬)



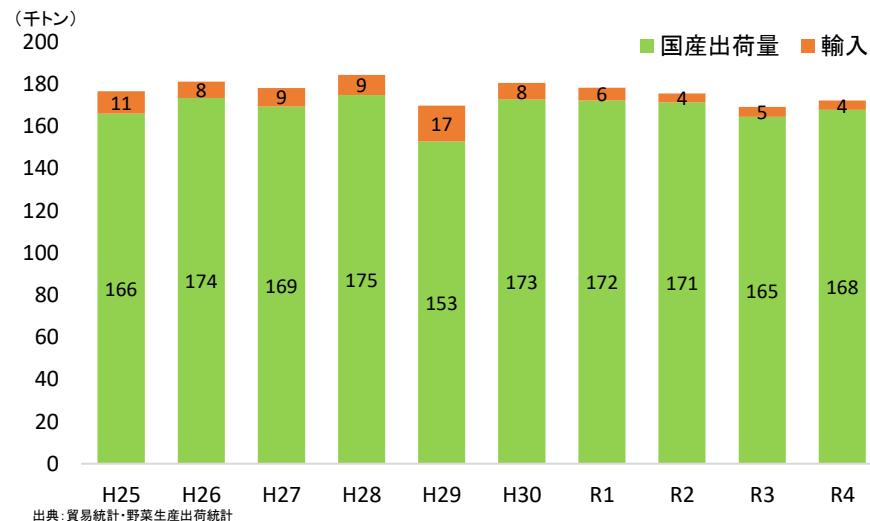
冬レタスの生産・価格等動向①

- 茨城、長崎、静岡、兵庫、熊本で全体出荷量の約7割を占める。10年前と比較し、全体作付面積は減少、全体出荷量は増加。主産県では、兵庫の作付面積・出荷量が減少する一方、静岡、長崎は大幅に増加。
- 国内生産量に比べると極少量ではあるが、加工・業務用に主に台湾から結球レタス、米国から非結球レタス(ロメインレタス等)が輸入されている。

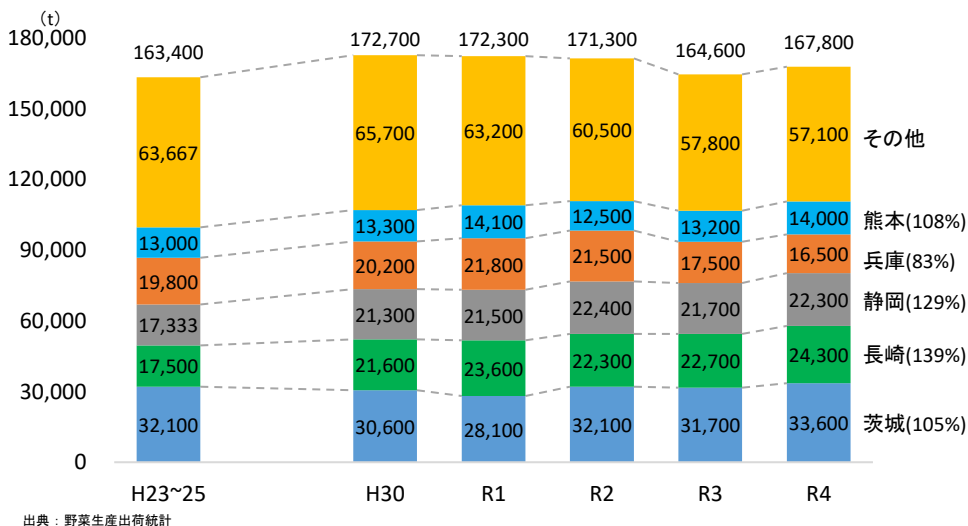
1. 作付面積の推移



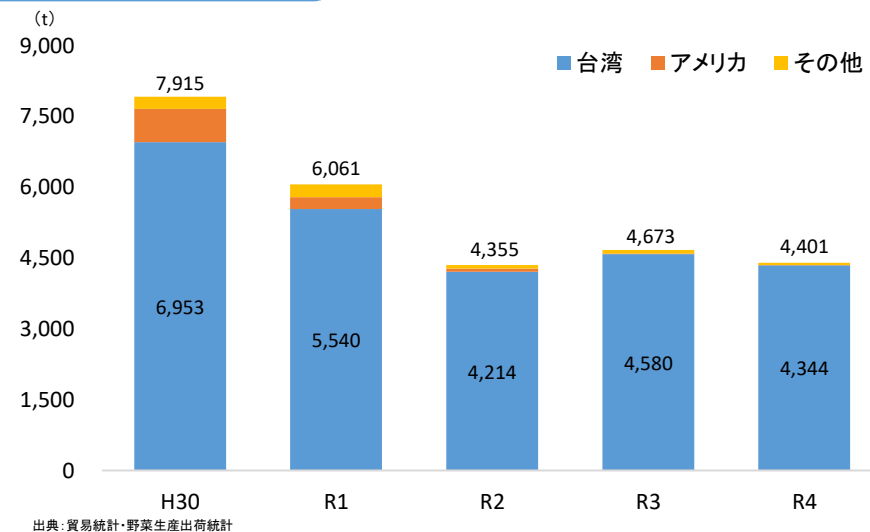
3. 出荷量と輸入量



2. 出荷量の推移



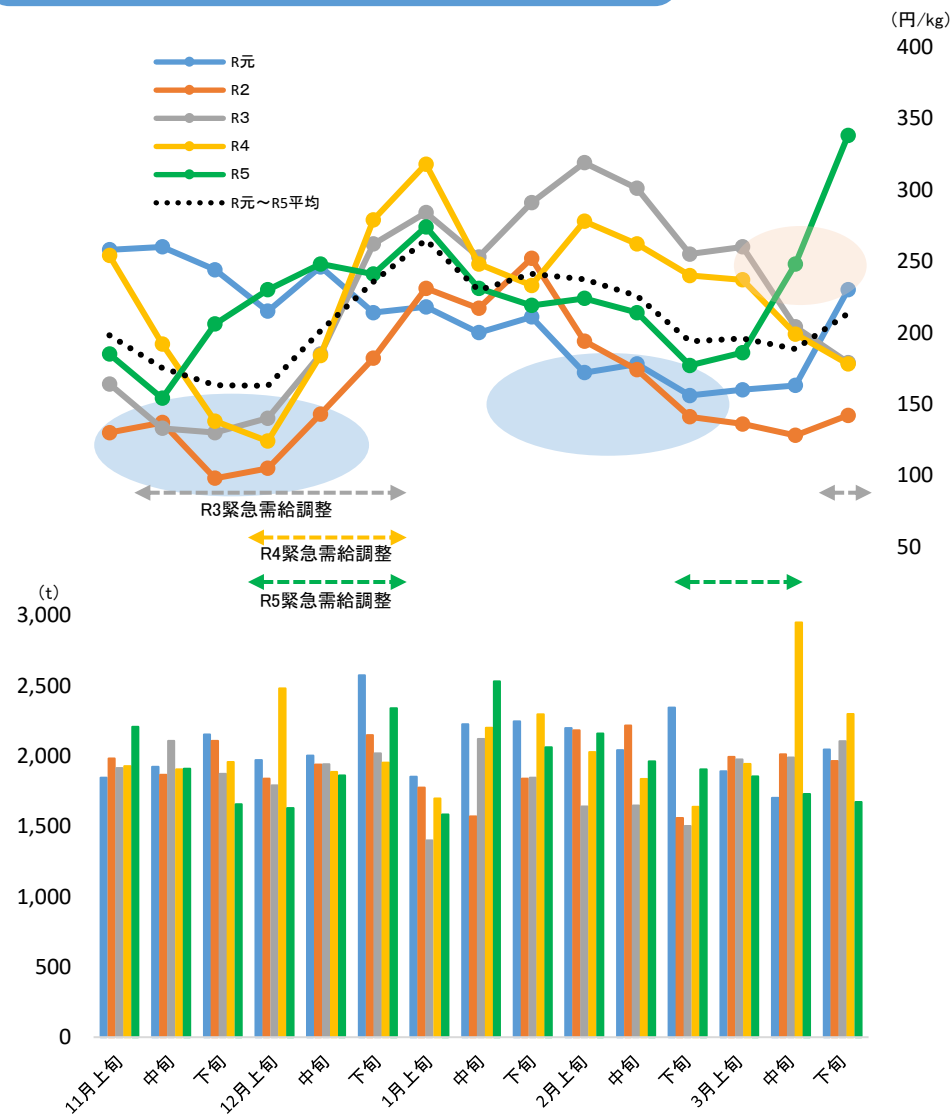
4. 輸入先国の内訳



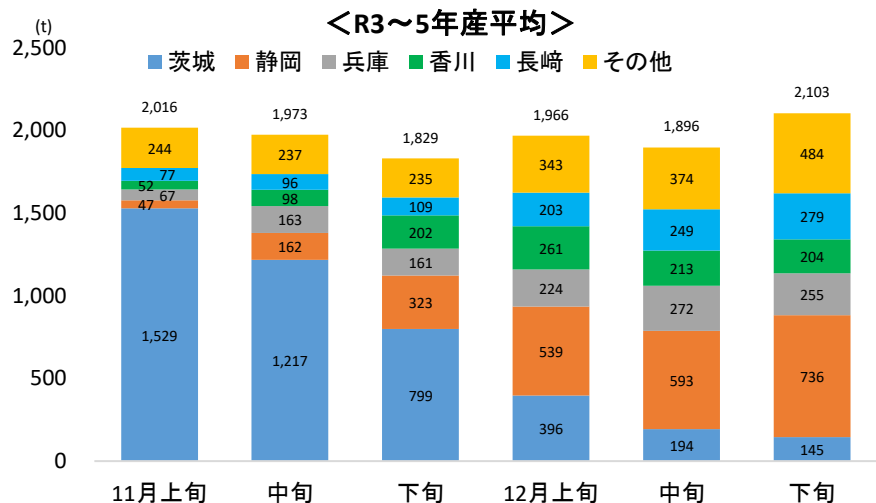
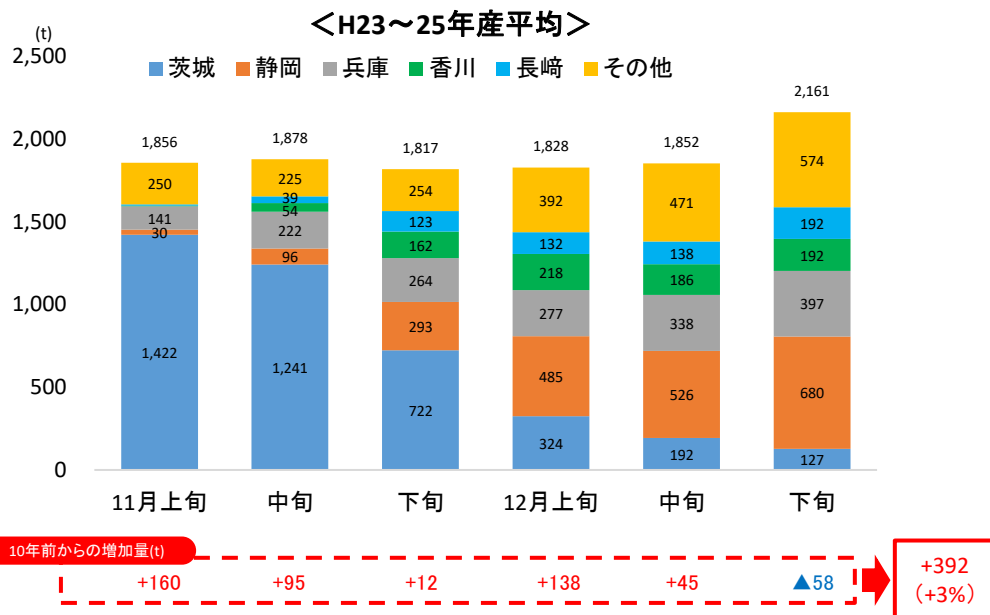
冬レタスの生産・価格等動向②

- 12月後半～1月前半までは平年並みで推移しているものの、前後の11月、1月後半～2月ににかけては出荷量が増加し、安値が続く年が多い傾向。
- 令和3年度～5年度の3年連続で緊急需給調整事業を発動。

5. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移



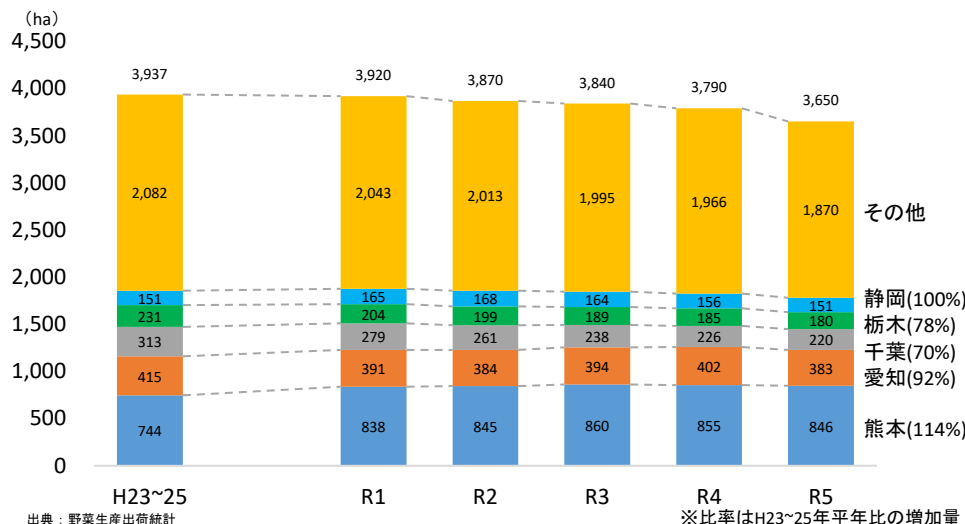
6. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷(11月上旬～12月下旬)



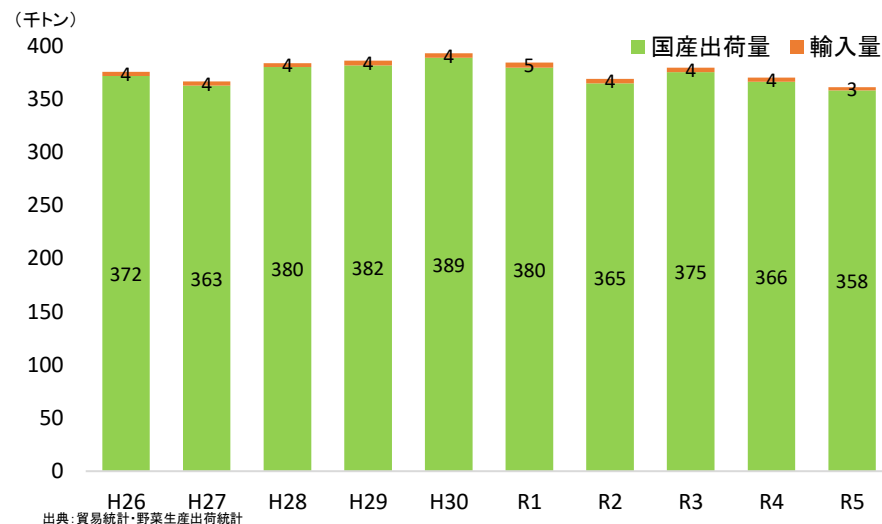
冬春トマトの生産・価格等動向①

- 熊本、愛知、栃木で全体出荷量の約5割を占める。10年前と比較し、全体作付面積・全体出荷量は微減。主産県では、愛知、千葉、栃木が作付面積を減らす一方、熊本は大幅に増加。出荷量も熊本が大幅に増加している。
- 生鮮トマトの輸入量は1万トン以下と極少量。輸入量の大半は韓国産。

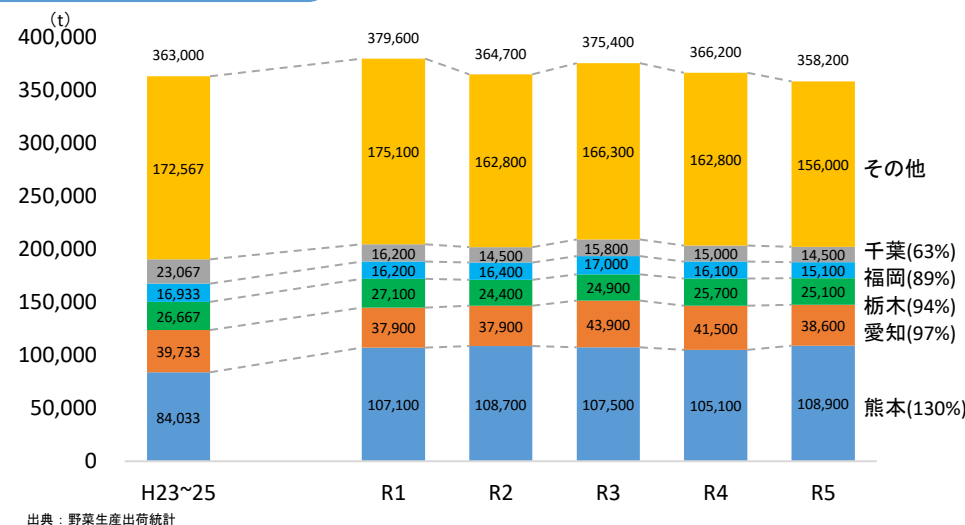
1. 作付面積の推移



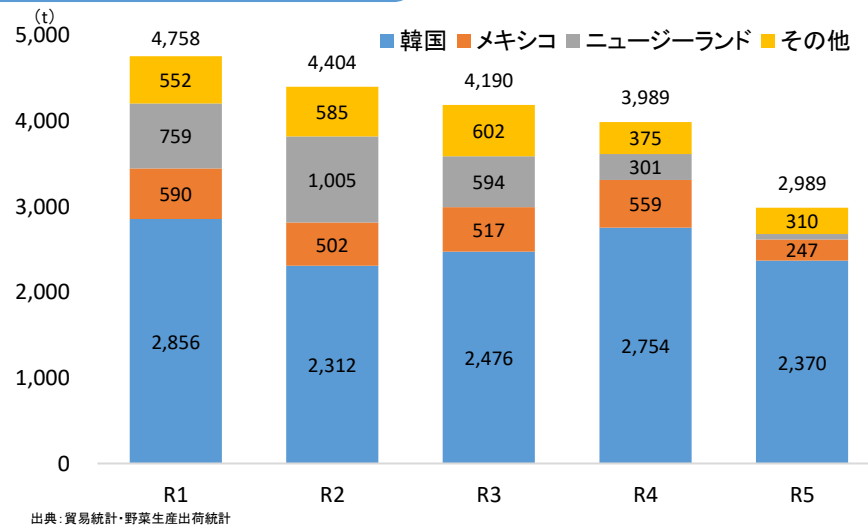
3. 出荷量と輸入量(生鮮のみ)



2. 出荷量の推移



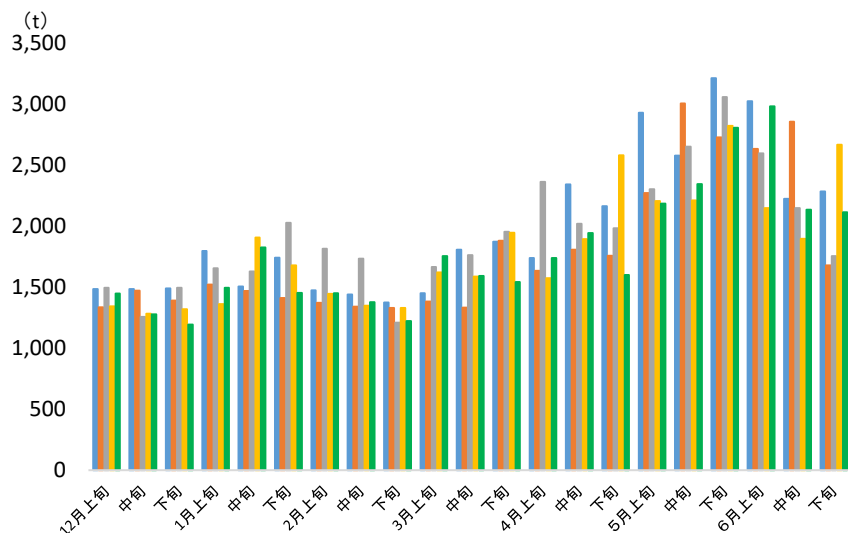
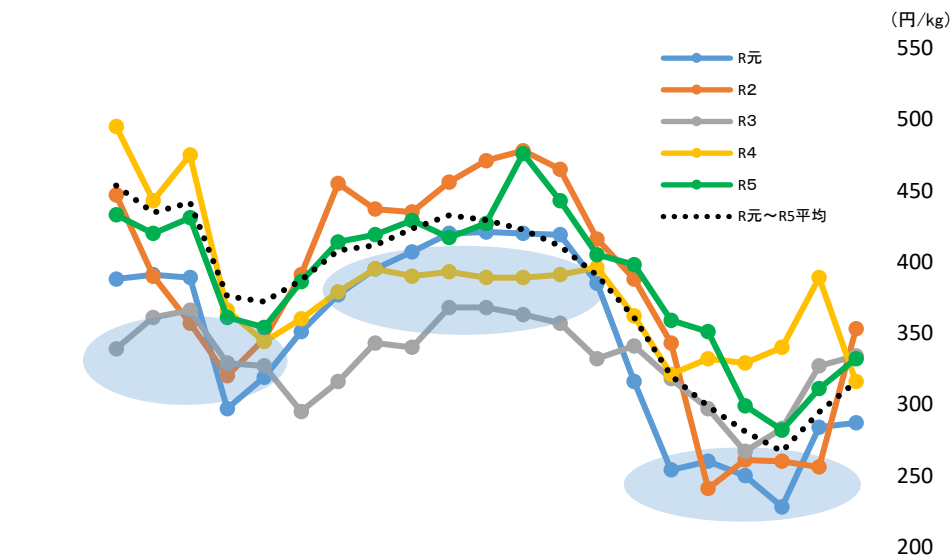
4. 輸入先国の内訳(生鮮のみ)



冬春トマトの生産・価格等動向②

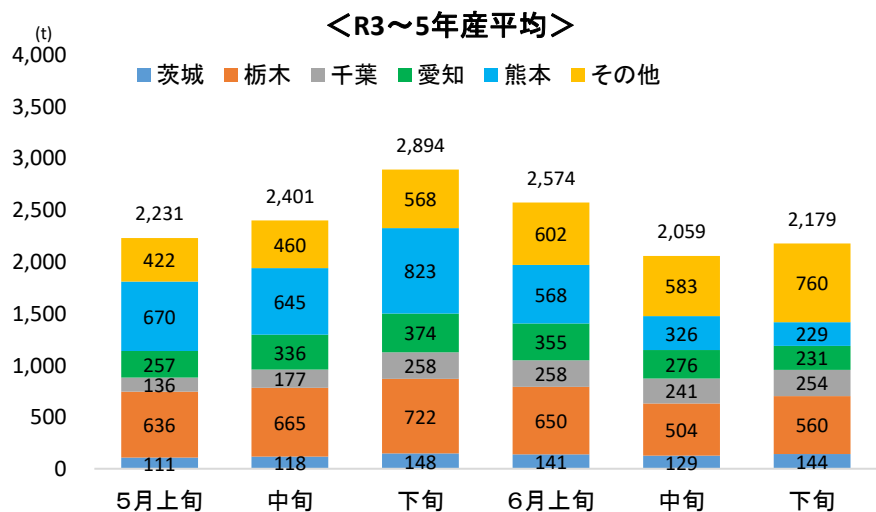
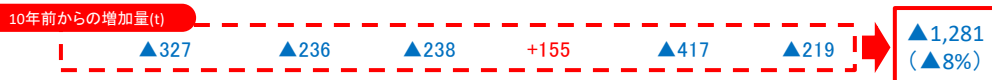
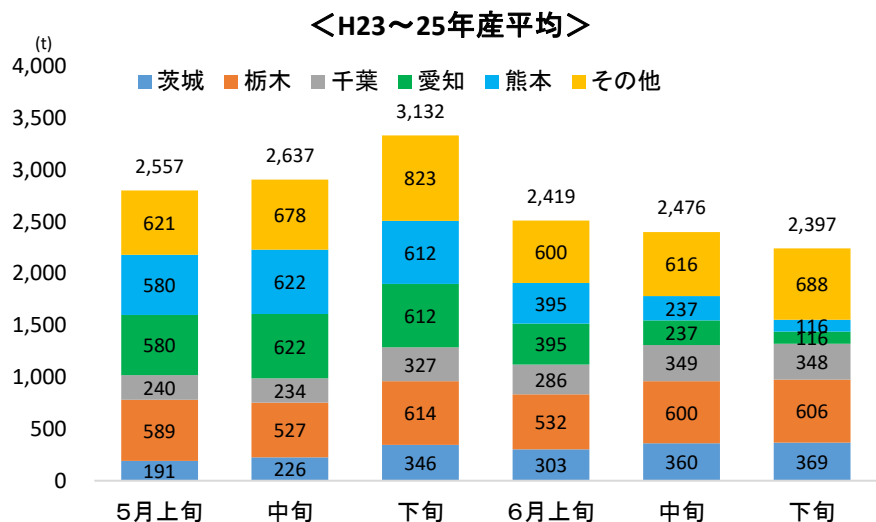
- 近年、出荷期間全体を通じて、安値が続く年が多くなる傾向が見られる。

5. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移(大玉のみ)



出典：(独)農畜産業振興機構「ベジ探」旬別価格・出荷量(東京都中央卸売市場)を基に作成

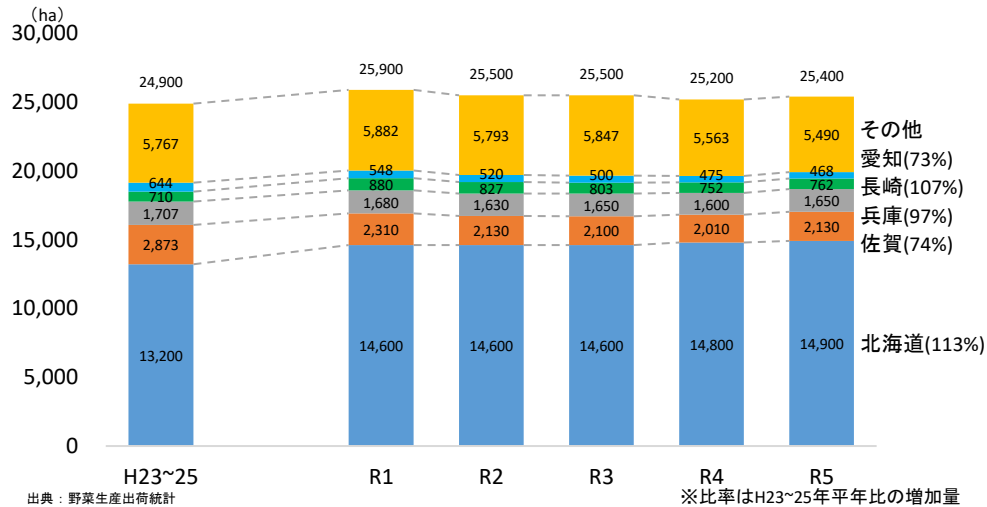
6. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷(5月上旬～6月下旬)(大玉のみ)



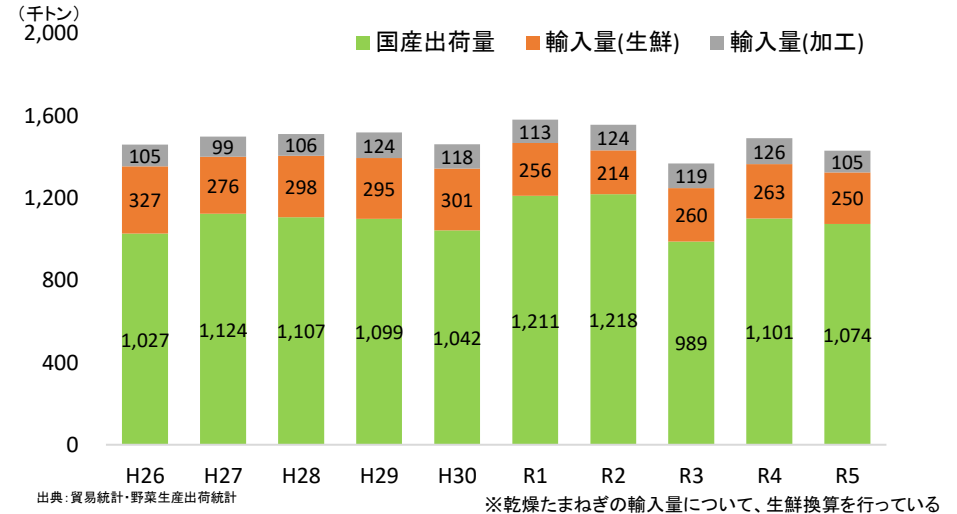
たまねぎの生産・価格等動向①

- 北海道、佐賀、兵庫で全体出荷量の約8割を占める。10年前と比較し、全体作付面積は増加し、全体出荷量は大幅に増加。主産県では、北海道の作付面積・出荷量がともに大幅に増加した一方、佐賀は作付面積・出荷量ともに大幅に減少。
- 生鮮たまねぎの輸入量は年25～30万トン程度で推移しており、その約95%が中国からの輸入。乾燥たまねぎは10万トン前後で推移しており、主にアメリカ、エジプト、中国からの輸入。

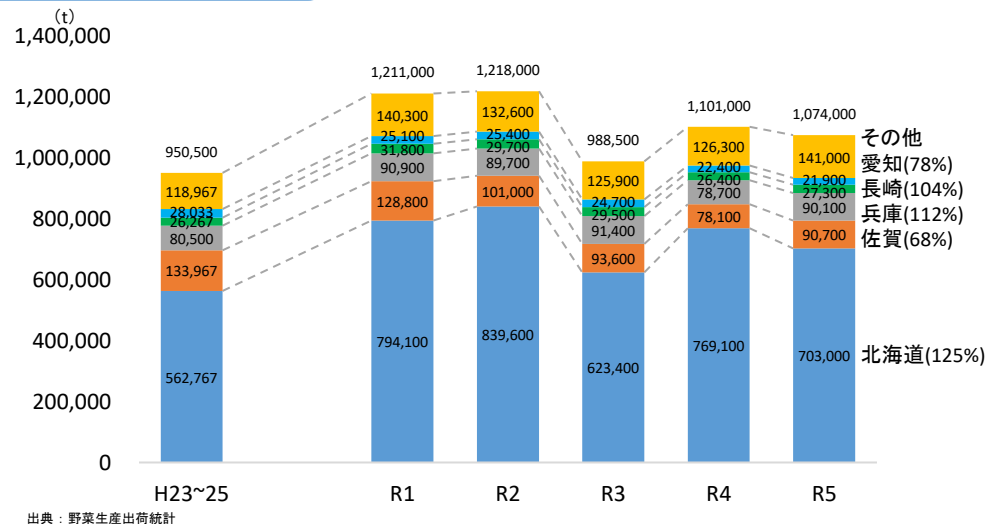
1. 作付面積の推移



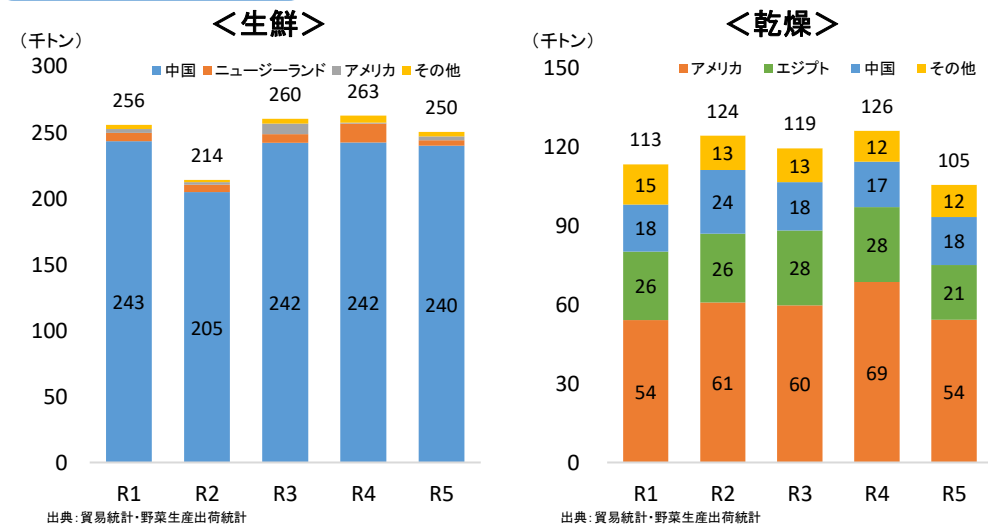
3. 出荷量と輸入量



2. 出荷量の推移



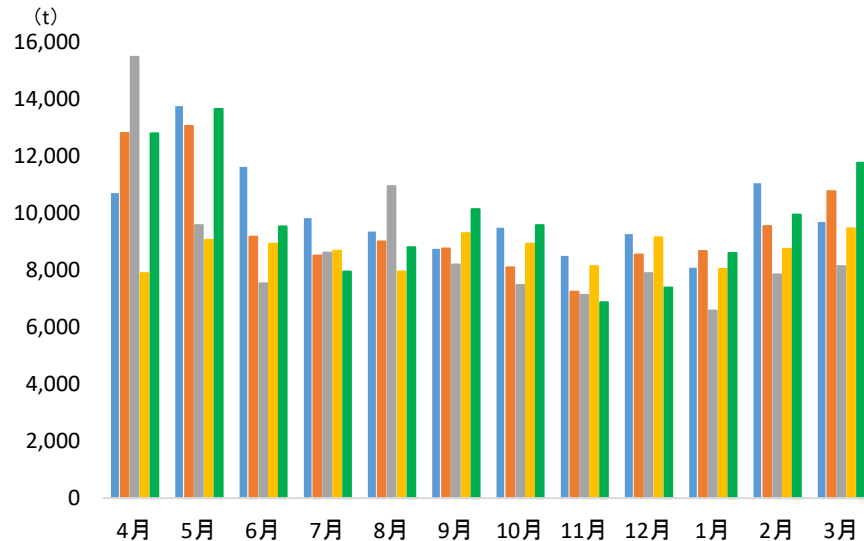
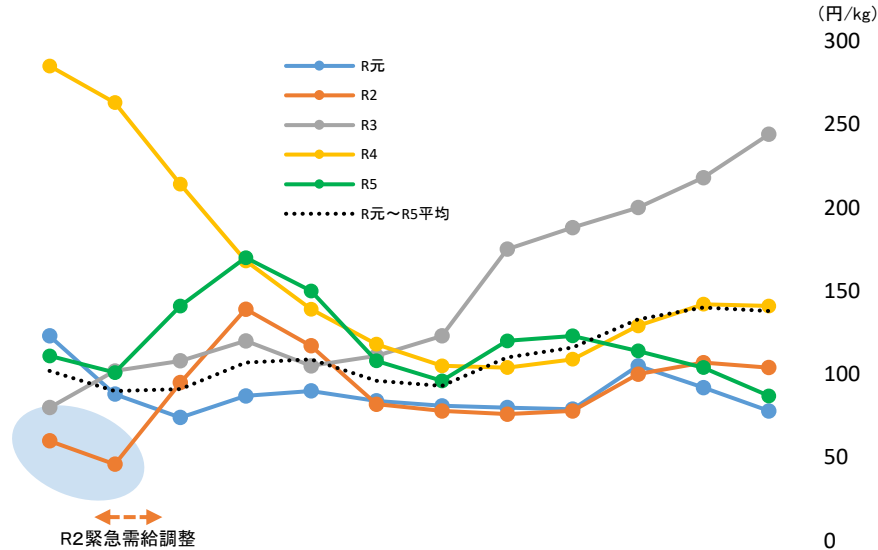
4. 輸入先国の内訳



たまねぎの生産・価格等動向②

- 令和3年10月以降、令和4年度にかけては、令和3年夏の高湿・干ばつによる北海道産の不作により顕著な高値で推移。一方、北海道、佐賀等で豊作だった令和2年度は春先に大幅な価格低落が発生し、緊急需給調整事業を発動。

5. 東京中央卸売市場における価格と出荷量の推移



出典：(独)農畜産業振興機構「ページ探」旬別価格・出荷量(東京都中央卸売市場)を基に作成

6. 東京中央卸売市場における出荷量の変遷(3月上旬～5月下旬)

